

# 青山教会会報

「十字架の死に至るまで」

フィリピの信徒への手紙  
二章五節〜十一節

牧師 増田将平

この手紙が書かれたきつかけは、ギリシアのフィリピという町の教会で起きていた争いでした。パウロは「小さい教会なのだから仲良くしなさい」とは言わず、「一緒に讃美歌を歌おう」と呼びかけて讃美歌を歌い始めます。きつと手紙を書きながら歌ったのだと思います。それはこの当時の教会でよく歌われていた讃美歌でした。

教会において、私どもが一つであることは、気が合うとか趣味が同じであるといったことに由来するものではありません。教会が一つであるという事実は礼拝で一緒に讃美歌を歌う時に現れます。その時私どもは主にあつて一つであると言うこ

とができます。それも一つの教会の中だけでなく、世界中の諸教会と、時代を超えて一つとなるのです。

パウロが教会の危機において歌った讃美歌はキリストの歌でした。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず」キリストは初めから神であられたお方だと歌います。そのお方が、「神と等しい者であることに固執しようとは思わず」と続きます。「固執」という言葉は「ぶんどり物」「略奪品」という意味があります。キリストはもとも神であられるので、キリストが神であることは戦いや略奪の結果ではありません。「固執」とはキリストが「神の身分」を、進んで手放されたことを表しているのです。略奪品とは命がけで手に入れたものであり、絶対手放さないものです。

私どもには手放したくないと思っているものがあります。物品ではなく、自分の立場のことです。私どもは自分の立場が、自分が望むように人に重んじられることを求めます。人から不当に扱われることには耐えられません。自分の立場、面子を守るのは当然のことだし、それがないがしろにされれば怒ります。私ども

は自分の立場をなかなか捨てることできません。そのようにして私どもは自分に固執します。

ここに、この教会の問題がありました。この教会に限らず、ここから人間の争いが生じるのではないのでしょうか。キリストは初めから神であられるのに、ご自分の立場に固執することなく、神の立場を手放されて人となられたのだと讃美歌は歌います。キリストは、マリアからお生まれになったその後も、ずっと神であり続けられました。人となられた神でありました。神であるという天のポジション、神の栄光、立場を捨てられました。だから主イエスを見た人は誰も神だとは分かりませんでした。見た目には全く他の人間と同じだったのです。

人間になるということは、私どもと同じ肉体を持つということです。肉体には弱さがあります。暑くなれば喉が渇くし、体が疲れます。主イエスはある時疲れ果てて、ガリラヤ湖の船の上で眠りました。そして何も食べないと空腹になります。人となられた神であるという、キリストの正体を見抜いたのは悪魔だけでした。だから悪魔は人となられたキリストを見つけて攻撃をしかけました。悪魔は、「人

間を救おうとするなら、食欲を始めとする人間のあらゆる欲望を満たすような救いを与えたらいいではないか」と提案します。この後悪魔は一旦退却しますが、これは悪魔の攻撃の始まりでした。主が悪魔の誘惑を受けられたということは私もとも全く同じ人間とされたことを意味しています。

この讚美歌はさらに「僕の身分になり」と続きます。キリストは王、総督、貴族ではなく僕となりました。「僕」とは奴隷という意味です。主が奴隷となったとは、どういうことなのでしょう。僕には主人がいます。主人に所有されており自由はありません。私たちは奴隷ではないし、私の主人は私であって、私の上に立つ主人は誰もいない、と言うこともできません。なるほど、そういう意味での主人は私どもにはいないかもしれない。でも私どもは本当に自由と言えるのでしょうか。私どもも主人は本当に私どもでしょうか。フイリピの教会の人々の姿はどうであったでしょうか。人はまるでぶんどり物のように自らの立場に固執します。よいことに固執することは必要でしょう。しかし私どもは神様がどのようにお考えになっているかは考えずに、自分が固執してい

ることはいつも正しいのだと自負しているのです。そこに私どもの不自由が現れます。

キリストが「奴隷のようになり、人間のように」とは「人間は誰もが不自由な奴隷のようにではないか」ということです。聖書はそれを「罪の奴隷」と呼びます。主イエスは自ら罪の奴隷となり、自由を失っている私どもの中に入ってこられました。私どもが自分の立場を手放すのはやむを得ないときだけです。しかし、キリストは誰にも強いられず自ら進んで、ご自身の身分と自由を手放してくださいました。全くの自由の中でそのような決断をなさったところに、神の愛が現れています。キリストは罪人の一人、罪人の兄弟となってくださいました。といっても、私どもと一緒に罪を犯すような兄弟になったのではありません。そのような連帯では人間を救うことはできないからです。

キリストは私どもと同じ僕の一人となりつつも、父なる神のみ心に従う僕となりました。パウロは歌います。「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」。人となられた神が十字架についてくださった。罪のないお方が、罪人の一人として十字架で死なれたのだ。キリ

ストは罪人である私どもに代わって、罪と戦い、十字架で死んで、三日目に復活し、天に上げられました。だからもはや私どもの主人は罪ではなく、私どもでもありません。今やキリストが私どもの主人となってくださいましたのです。

教会の争いに心を痛め、讚美歌を歌ったパウロはこのとき大聖堂の一室にいたのではありません。彼は牢獄の中にいました。暗い牢獄の中でパウロの歌声が響きました。私どもはまるで牢獄のように、暗くて見えない壁に四方を取り囲まれているときも讚美歌を歌うことができます。パウロはこの歌によって力づけられ、パウロの心は喜びで満たされました。

「私は一人ではない。私の主人はローマ皇帝でも、私自身でもない、やがて迎える死でもない。私を愛し、人となり、十字架で死んでくださったキリストが今、天にあつて私の主人として私の人生を治めてくださっている」

私どももこの歌を歌うことができます。キリストを主としてお迎えし、讚美歌を歌いながら生きるとき、私どももまた、神の愛の中で自由にされ、喜ぶことができるのです。